

町民文芸



只見短歌会

令和七年四月詠草

雪に折れ椿の枝の乱れあり堅き蕾の無数に付きて

目黒 富子

通院におかげ様での我が人生昔懐かし思ひ出の数

関谷登美子

桜舞ふ道を跳ねゐる二歳児の笑顔ふはりと春風なづる

立花 奏音

入院の母を待ちゐる^{みどりこ}嬰兒の無邪気に笑へば愛しき^{しる}著き

新国由紀子

田子倉の湖水に沈む集落の資料展示にわれは見入れり

渡部ヨリ子

只見俳句会

四月定例会

息上げてとどまりて聞く初音かな
稽古終え来し方思う春の月

一 恵

雪解けや庭の蛇穴のぞき込む
若き日に二人で植えし桜かな

真理子

冬の朝母の苦言を懐かしむ
春の雨線香灯し一人言

睦 子

花並木時折小さき人の影
久々の生家の仏間あたたかし

礼

ピカ／＼とくたびれカバン登校す
春泥の上にも並べ種子の箱

一 穂

陽春やまだ冷たき畑の土
青空や柳の芽吹き包みおり

修 一

春や春彦根の城に集う人
桜散る^{ものふ}武士の栄華今いずこ

信

誰その計報聞いては淋^{さび}し増す
農道の深き鼓動や草萌える

都

春なれど背を丸め行く散歩道
酔えば直ぐ眠れる夫や座禅草

味代子

